



「国や企業の負担で
給付型の奨学金制度を」
という運動を大きく
すすめてみましょう！

副看護部長 酒井富喜子

2016年、春いちばんの嬉しいお知らせは、医師の国家試験に続き、近畿高等看護専門学校では数年ぶりに全員が合格したことです。4月から新人として研修をうけながらがんばっています。これからもご指導をよろしくお願いします。

さて4月は入学式、新入生からは夢への一歩を踏み出した喜びが伝わってきます。毎年春と夏休みに行なっている高校生1日看護体験参加者の15%が奨学生になっています。高校生からのつながりが実を結び、継承者として育っていきます。

一方、マスコミでも伝えていますが、大学生の二人に一人が奨学金を借りています。私学の看護系大学は4年間で約700万円前後必要だといわれています。ちなみに近畿高看は専門学校ですが、それでも大学の3分の1ほどが必要です。京都保健会の奨学生にも学生支援機構（以前の育英会）から借りている学生も少なくありません。日本の未来を担う若者たち、ましてや看護という将来国民のいのちや健康に関わる仕事に就くという学生に、多額の借金を背負わせることに憤りを感じます。また学費や生活費のためにアルバイトに明け暮れ、学業に影響するといった本末転倒な事態も生まれています。「国や企

業の負担で給付型の奨学金制度を」という運動が起こり、国会でも取りあげられています。私たちは「金の切れ目がいのちの切れ目」であってはならないと、日常の医療・看護に取り組んでいます。子どもたちの未来や夢が花開く運動を広げていかなければとの思いを強くする春でした。



友の会
活動家紹介

上京健康友の会 会員
浅野紘史さん



上京健康友の会では、友の会会員強化月間中に一人で「いつでも元気」を23部増やした会員さんがいます。浅野紘史さんです。以前診療所の近くで中華料理店を営んでおられ、絵画や釣りなどの趣味も多彩です。月間中は、ほぼ毎日上京診療所の待合室に来ては「元気」の購読を訴えていました。「この前、聞いたで」と言われますが、「そんなことで声を止めることはしない」と訴え続けて読者になった方もあり、地道な活動が結果につながっていききました。現在は友の会の運営や水彩画サークルの講師をするなど、幅広い人たちと交流を広げています。挑戦者魂を持った人で、月間が終了しても「元気」を増やし続けておられます。

（上京診療所 高矢紘次